


 書評

市川忠彦 著

誤りやすい異常脳波 (第3版)

山内俊雄

脳波の日常的な疑問に答える深みのあるガイドブック

脳の検査法は格段に進歩している。特に画像診断は CT から MRI へ、そして 3 次元画像からさまざまな機能画像へと、その進歩はとどまることを知らない。そんな中であって、いわゆる臨床脳波は、脳から導出された電流を波形としてみるという方法をかたくなに守っている。もちろん、脳波のコンピュータ解析やマッピングも行われているが、脳波波形を通して、脳の働きを読み取ることができるという臨床脳波の意義は、今でも変わらない。

それにしても、脳波波形を通して脳機能を読み取る姿勢が、教育現場から少しずつ薄れていっていることは残念なことである。それはおそらく、現代では、アナログ的姿勢よりデジタル的姿勢がより好まれ、数字化されたものに、より安心を求める風潮とも関係しているように思われる。

とはいえ、脳波のもつ情報量の多さと、機能診断として優れた検査法であることに変わりはない。したがって、脳機能に関わりを持つ者すべてにとって、脳波を駆使して、脳についての理解を深めることが必須の要件となる。

本書は、脳波の持つ、とっつきにくさ、分かりにくさを払拭するために、著者自らが経験した 200 例に及ぶ脳波を呈示して具体的に説明しており、その意味では、単なる解説書とは異なるものである。しかも、「この α 波の出方は異常か」「この程度の左右差は正常か」「高振幅で先のとがった α 波をどう考えるか」などなど、いずれも日常的に遭遇することの多い疑問に答えるような項目が満載されている。それもレベルによって、必ず修得しなくてはならないビギナーコース、もっと経験を積んでから学べばよいアドバンスコースと 1 つひとつの項目にレベル設定がしてあるのも、メリハリが利いて、学ぶ者にとっては大いに助けとなる。

本書は、第 3 版とあるように、1989 年に初版が出て以降、好評裡に、16 年の間に版を重ねて、今回の大幅改訂となったものである。今回の改訂は、国際臨床神経生理学会が用語を改訂し、いくつかの波形の解釈に新しい指針を打ち出したのに合わせて、項目の追加や解説を付け加えたものである。その結果、図も 159 枚から 200 枚へと大幅に増え、内容の充実もはかられた。

著者は、国内で臨床脳波の研鑽を積んだ後、フランスの臨床脳波学の泰斗であった Gastaut 教授の下で学んだ、この道の第一人者である。そのこともあって、脳波の解説の随所に、例えばこの波は一次性両側同期か、二次性の同期化によるものかといった、病態に関わる解説のあるのも、単に現象を読み解くだけではない、深みのある解説となっている。

これまでの経験からすると、脳波に親しむのは、研修初期の、まだ若いうちである。医師になって何年かすると、多くの者が脳波を記録したり、読んだりするのが億劫になり、この有益な脳機能判定の武器になじめず、自らの能力を放棄することになる。したがって、医学生や研修医、あるいは検査に携わる者や医療関係者はなるべく早い時期にこの本をもとに勉強すべきである。さもないと能力を高める時期を逸することになる。

その意味では、先輩を困らせて本書をネタに、臨床と脳波の結びつきも含めて、お互いに議論しながら勉強するのが、脳波を自家薬籠中のものにする最良の方法ではないだろうか。そのことがとりもなおさず、巻頭にあげられた Gastaut 教授の言葉、脳波学を学ぶことも大切であるが、もっと大切なことは、『患者と 2 人で、一種のシンポジウムを行うことである』という趣旨に添うことになるう。

(埼玉医大学長・精神医学)

● B5 296 頁 2005 定価 5,775 円 (本体 5,500 円 + 税) 医学書院